身体表現ゼミナール卒業制作発表会

表現文化だより第 29 号より、『第 15 回身体表現ゼミナール卒業制作発表会』のインタビュー記事で割愛した、「三、コロナ禍で大変だったこと」について掲載する。また、インタビュー内容に加え、編集員が取材した際の会場の雰囲気等も紹介する。

■松岡雄大『心を抱えて進む』

ミーティングで集まることができないなどの運営が一番難しかった。作品制作と運営を同時進行しなければならない中、作品制作ばかりが進んでしまうことで運営が追いつかず、自分の練習の時間を充分に取れなかった。

■佐藤由規『鳥の籠』

練習ができなかったことや、皆で作品共有ができなかったことが特に大変であった。一人だけでの練習や、先生とだけの作品制作は周りが見えなくなりやすいことがきつかった。他人の視点があってこその作品制作で、自分の視点だけなら自己満足になってしまうため。

■中濱ももか『「映」えませんけど何か？』

オンラインでの話し合いで、画面上だと伝わることも伝わらなかったことが大変であった。面と向かって話し合った方が、自分の気持ちが届きやすく、創作の波にも乗れると感じた。制限が多く、練習時間が不足したことも難点であった。また、卒業制作発表会が開催されないかも知れないという不安や、学外の方にも見てもらいたい気持ちが強かった。

■平岡有美『私の救われ方』

学校に来ることがほとんどなく、就活や教習、アルバイトなどに時間を取られてしまったため、創作活動の時間があまり取れなかった。家で簡単なことしかできず、本格的に練習できたのは九月くらいになってしまった。

■劔持侑治『モノクロームアバター』

例年は定期的に中間発表を行い、他人から作品のアドバイスを受ける場があったが、コロナウイルスの影響でそれができず、結果として自分一人で考えることになってしまった。発表直前に様々な人に見てもらい、動きの調整をして完成させた。段階を置いて制作ができなかったことが大変であった。

■余傳茉鈴『レッテル』

動ける場所の確保が大変だった。自宅が和風建築で、畳ではない場所が廊下くらいしかなかったこともあり、練習場所を十分に確保できなかった。畳を傷つけるわけにもいかず、自宅では動きの練習に熱が入らなかった。また、学校の練習場所に来て、ゼミのメンバーの顔を見ると、「何かやらなければならない」と思うが、学校での練習が困難だったため、「何かやらなくてはならない」と思うタイミングがギリギリになってしまった。

■三年生『素敵な人生（おへや）の見つけ方』

声出しなどの基礎的な訓練がなかなかできなかった。また、リモート会議の予定が合わない、施設の予約が大変である、画面越しでの読み合わせはタイムラグが生じる、対面での練習と画面越しでの練習を比べた際に感覚が違う、動きの練習ができない、など様々な苦労があった。

■猪原嘉紘『レッドノーズ～悲しみの淵～』

動く意欲が湧かなかった。話を作る事には集中できたが、動きをどのようにするかはなかなか決まらなかった。9 月からようやく制作し始めたことで、本番ぎりぎりでようやく動きの案が浮かんできた。

■小玉沙良『True Confidence』

コロナ禍で困ったことは、人を使う作品であるにも拘わらず、人を使いうことができなかったこと。数人で絡み合うこともしたかったし、マスクもつけたくなかった。しかし、一人で作品を作ることしかできず、先生とも十分な時間を取ることができなかった。

■佐武康平『脈打つ、環る、潤う』

コロナ禍で夏休み前に学校に来ることができず、練習の時間が取れなかったことが普段と違い、大変だった。

【練習中の雰囲気について】

発表会前夜の練習では、ワクワク感と共に、僅かにピリピリした空気が漂っていた。衣装合わせをしながら、「もっと練習をしたかった」とつぶやく先輩の姿を見て、新型コロナウイルスの悪影響を強く感じた。当日の控室には、ピリピリした空気はなく、ワクワク感と心地よい緊張感が漂っていた。本番を終えた先輩方は、柔らかい笑顔になっていた。コロナ禍での練習不足による焦りは感じていたはずだが、笑顔で乗り切った先輩方から、冷静な心の

持ち方を教わった。（二年藤井）

新型コロナウイルスの影響で、思うように練習が進まない中で、先輩方は夜遅くまで練習されていた。その様子からは、作品を少しでもいい形で見てほしいという、作り手の願いが感じられた。緊張感はあっても、決してイライラせず、冷静かつ和やかに作品制作に取り組む様子から、作品にかける思いが強く伝わってきた。時間が限られている中で、練習日も当日も、取材を暖かく迎えて下さった心の余裕からも、学ぶことが多い取材だった。（二年万殿）

【インタビュー中の雰囲気について】

当日の昼頃、先輩方の空き時間にインタビューを行った。本番直前の忙しい時間に行ったにもかかわらず、緊張感がありながらも、わいわいとした心地よい雰囲気の中で、先輩方の気持ちなどを聞かせてもらった。各々の作品の深堀ができればと思って始めたインタビューは、重たい内容のものが多かった。しかし先輩方の答える姿は、淡々としていたり、はにかみながらであったりした。また、穏やかであったり、真剣であったりと受け答えは様々ながらも皆軽やかだった。自分の抱えるものを作品にすることは、こんなにもかっこよく自分のことを語れるようになることでもあるのだと実感した。（二年吉賀）

【練習・準備中の雰囲気について】

私が取材に赴いたのは二日間だけだったが、先輩方の作品にかける熱量は受け取れたと感じている。衣装や小道具を制作したり、鏡の前で振付の調整を先生と行ったり、エキストラに指示を出したりと忙しくしていた。そうかと思えば、練習風景の撮影をしている私のカメラに応えてくれ、談笑もするなど、緩急のついた朗らかな雰囲気だった。

教室自体は個人制作組と団体制作組で仕切られていたが、それを感じさせないほどの一体感があった。また、プロの外部スタッフに指示を仰ぎながら、本格的な機材の準備・後片付けも行っている。本番後に二時間もの間、集中を切らさずに様々なことを行えるのは、自分たちの作品への責任感と、舞台を支えてくれた方々への敬意があるためだと感じた。（二年吉賀）

先輩方の作品制作に取り組む姿から多くを学んだインタビューだった。岡本ゼミの皆様、貴重な経験をさせて頂き、ありがとうございました。